

『遊山西村』 陸 游

山紫水明の地故郷で詠んだ名篇

靖康の変と陸游

陸游は一一二五年宋の宣和七年一一二〇九年嘉定二年の南宋

第一の詩人である。字は務観、

号は放翁である。陸家は越州会稽山陰(現浙江省紹興)の代々

官僚の出た家柄で、父も祖父も

官僚で儒家の經典にも深く通

じ、著書もあり、学問や文化に

秀でた恵まれた環境であった。

が陸游がこの世に生を受けた宋

王朝の社会情勢は、女真族が

一一一五年金国を建て、金軍は

この年は南下して宋を脅かして

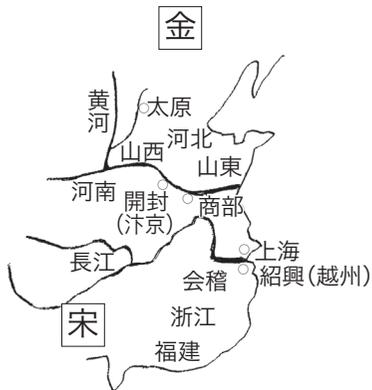


開封の街  
北宋の都(汴京) 当時の建築物の様子が今も残されている

いた。一一二六年八月靖康の変が起こった。金軍はこの年のはじめ再び侵略してきた。その際、宋に莫大な賠償金をとって撤退していたにもかかわらず、又南下したため、宋の都汴京(現開封)は陥落し、上皇徽宗と皇帝欽宗は捕らわれ、王族や高官三千人が北方に連行された。宋は一旦一一二六年滅亡したのである。この時、陸游は生まれて間もなしで、当時父陸宰は太原方面で役人をしてしたが、丁度免職になったので、一家は戦火を逃れて故郷会稽山陰に向かった。十代の半ばまで陸游はこの地で過ごした。高宗が翌一一二七年汴京の東南の応王府(現商邱)にて即位し、南宋がようやく復活した。その後も再々金軍が攻め入り、度々高宗が遠くへ逃れたり、都を変えたりしている。

愛国詩人陸游

陸游は物心つくころ、金の攻めくる大乱にあり、戦火を逃れて故郷へ向かう途中のことを、「中原で日々逃げまどい淮水のほとりでは、夜中に敵軍の馬のいななくを聞き、にわとりが朝を告げるのも待たずに逃げ出し、家族のめいめいが、ふとこ



ろに一個の餅を入れ、草むらに身を伏せたままだった」と詩に詠んでいる。南宋王朝は混乱衰退し、江南一帯は金軍南下でひどく荒され、掠奪殺傷が横行した。この様な体験からと、又陸家は北伐を唱えていたので、その中で育った陸游には、反異民族の強い思いと、愛国精神のたぎる人格が形成された。その精神を詩に多く読み、愛国詩人といわれる。絶筆「示兒」の如き珠玉の詩を多く残している。

### 情愛詩人陸游

陸游は唐琬とうえんという女性と二十歳で結婚した。夫婦は仲睦まじかったが二年ほどで離縁した。嫁姑の仲がうまくいかず、親が嫁を追い出してしまったのである。陸游は親に内緒で家を借り、唐琬と逢っていたが見つかってしまい、それから逢えなくなつた。唐琬の面影を一生追ひ求め詩を作っている。やがて陸游は王氏と再婚、唐琬も再婚した。十年の後、二人は紹興の沈家の庭園で偶然再会した。唐琬

に対して情愛を、「胸いっぱいあふの憂い、何年別れて暮らしたことか、ああ過あまてり」と、「釵頭鳳さいとうほう」の詞を詠んでいる。また子や孫、近隣の村人たちの情に



放翁先生

あふれる詩も多くある。子と蛩を追う「月下」などに満ちた名詩である。

### 田園詩人陸游

十八歳から儒学者であり詩人の曾幾について詩や生き方を学んでいた。陸游は政府に反抗(北伐を主張)する為、度々免職になり、その都度故郷の会稽山陰へ帰った。江南の美しい自然の中でゆったりと暮らし、陶淵明や杜甫、白楽天を慕った。ここでは田園詩人としての詩篇を数多く残している。「遊山西村」もその代表的な詩である。

#### 山西さんせいの村に遊ぶ 陸游りくゆう

莫笑農家臘酒渾 笑うこと莫れ農家臘酒の渾るを  
豊年留客足鷄豚 豊年客を留めて鷄豚足る  
山重水複疑無路 山重水複路無きかと疑う  
柳暗花明又一村 柳暗花明又一村  
簫鼓追隨春社近 簫鼓追隨春社近く  
衣冠簡朴古風存 衣冠簡朴古風存す  
從今若許閒乘月 今從り若し閒に月に乘ずるを許さば  
拄杖無時夜叩門 杖を拄えて時と無く夜門を叩かん

農家の暮れじこみの酒がどぶろくだ、などと笑わないで下さい。昨年は豊作だったので客人をもてなす鶏や豚は十

分ありますよ。村への路は山が重なりあい又川は幾筋にも流れていて、行き止まりではないかと思われたが、柳がこんもりと茂り、花が明るく咲く村里があらわれた。春の祭りが近いのか笛や太鼓が私の後を追ってくるように聞こえる。村人の服装は素朴で古きよき名ごりを残している。これからも暇な時、月の光にさそわれてやって来てもいいよと許されるなら、気の向くままに杖をついて、夜中に訪れたいものだ。

## 鑑賞

乾道三年、西暦一一六七年、匈奴北伐論の一派として免職になり、郷里で暮らしている時の陸游四十三歳の作。

陸游が心から郷里の田園を愛し、その生活に安らいでいたかが、読み取れる七言律詩である。頷聯（三、四句）は叙景を詠んだ秀句として広く知られている。あたりの地形を巧く表現している。複数の詩の解説書にも、「桃源郷を訪れる様な豊かで好ましい風景である。」と、頸聯（五、六句）も、江南の村人の様子を桃源郷ふうに詠じている。そして最後にまた訪れたいたい気持ち、農家への謝礼の気持ちと、世俗をはなれた悠悠とした境地を述べている。田園詩人といわれる所以ゆえんの代表的詩である。

生れた時からテレビの音を聞き、物心ついた時からファミコンで遊び、全て機械化、電化による便利な生活をして

成人し、真の田園風景やその良さの解らない若人も多い。今。「山重水複疑無路 柳暗花明又一村」を読んで心に響かせていただきたい詩である。又白雲の下、陸游を思つて田園を歩いて欲しい詩でもある。きっと情操の泉が湧いてくるであろうから。